

備中高松城 一史蹟の保存と継承一

羽柴秀吉の水攻めで知られる備中高松城は、周囲を広大な低湿地がめぐる要害で、中国地方のみならず四国西部と九州北部にも勢力を伸ばしていた毛利氏が、天下統一を進める織田信長方との対決で存亡をかけた決戦の舞台に選んだ場所でした。そしてここは本能寺の変によって秀吉の天下取りの起点にもなったため、高松の水攻めは日本史の分水嶺ともいえる重要な戦役となりました。

この高松城址と水攻め堤防の遺構を保存するために、地元の人々は明治42年に高松城址保興会を結成して活動を始めましたが、その中では退役陸軍獣医師で岡山県高松農学校（現、岡山県立高松農業高等学校）の教諭（後に校長）を務めた高田馬治（明治15年生～昭和43年歿）が、遺跡を精力的に研究して執筆や講演を行い、保存運動を力強く牽引しました。

高田馬治は、明治15年に岡山県小田郡尾坂村（現在の笠岡市尾坂）に生まれました。明治38年に岡山県高松農学校獣医科を卒業すると1年志願兵として陸軍に入隊しましたが、明治39年に退役すると埼玉県の農業技手となり、明治44年から母校の高松農学校へ戻って獣医学を教え、大正4年6月に教諭となりました。昭和22年から24年にかけて校長に就任し、戦後の学制改革の折に学校経営に手腕を発揮したほか、岡山県獣医師会長としても活躍して高い評価を受けました。しかし彼の名前は、そうした公務での業績以上に、備中高松城の歴史の研究と史蹟保存への貢献によって広く知られています。

彼が行ったことの中では、昭和5年11月に広島県と岡山県で開催された陸軍特別大演習において、演習場に近い高松の地へ行幸した昭和天皇を前に彼が行った御前講演（進講）が広く知られています。これは備中高松城の関連遺構が文部省から念願の史蹟指定を受けた翌年の出来事でしたが、関連の記録からは、彼がこの講演に込めた並々ならぬ決意が伝わってきます。

そこでこのたびは、昭和61年に遺族から岡山市へ寄贈されて岡山市立中央図書館と岡山市埋蔵文化財センターで保管されている高田馬治の関係資料から約70件を選び、彼と彼をめぐるさまざまな人の活動の跡を振り返ることにしました。

ひとつひとつの資料は必ずしも読み取りやすいものばかりではないかもしれませんが、それらの行間からは史蹟保存のために注がれた、ほとぼしる情熱を感じ取ることができます。この展示の解説冊子として作成された本書が、高松城址と関連の水攻め遺跡の理解はもとより、地域における史蹟保存の活動のひとつの事例の紹介として、多数の方々の参考になれば幸いです。

*本書は、岡山シティミュージアムにおいて、当初は令和3年(2021)6月1日から7月4日まで開催予定のところ、新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休館のため6月22日から7月4日まで開催された常設展内企画展示「備中高松城 一史蹟の保存と継承一」の解説冊子として作成し、ウェブ上に公開する電子版で発行したものです。

*資料のサイズは原則として縦×横の順で記しています。

*資料名の前にある数字は展示で付した番号です。本書ではレイアウト上、その順序どおりでない箇所もあります。

*高田馬治氏の著作物は著作権の保護期間内にあり、本書への掲載には権利者の承認を得ています。

*本展の開催にあたっては、資料所蔵先の岡山市立中央図書館と岡山市埋蔵文化財センターはもとより、高田直芳様から資料の出品を含む数々のご協力をいただき、高松城址保興会（会長 林郁哉様）をはじめとする高松地域の方々から多数のご教示と映像制作へのご協力をいただきました。記して感謝を申し上げます。

目次

備中高松城 ―史蹟の保存と継承―	1
目次	2
1 御前講演	3
2 史蹟指定	11
3 高松城趾保興会	19
4 古記録	27
5 研究書	31
6 普及活動	35
7 地図・絵図と実測図	39
8 考古資料	45
9 長野川の水奉行遺跡	51
10 清水宗治	62
11 保存から継承へ	69
高田馬治（著）「昭和五年の御前講演 ―陸軍特別大演習において―」	78
映像作品、参考文献（抄）	80

1 御前講演

高田馬治は高松農学校の教師を務める傍ら、勤務地の歴史に惹かれて高松城址と水攻め合戦の歴史の研究を行っていました。大正9年には、羽柴秀吉の陣所であった石井山から城址を望見し、多数の人の前で案内している様子を写した1枚の写真（本書24頁）が残っていますが、その頃には彼は備中高松城の研究家として名前が知られてきていたようで、昭和4年には岡山県郷土史講習会で行った発表が姫路に駐屯していた第十師団（岡山県の東半まで管区）の本庄繁師団長（中将）の目にとまり、師団将校の教育のためにと求められてそのときの稿を提出しています。そして本書11頁以下で紹介しますが、この年には高松城址と水攻めの堤防跡が文部省から史蹟に指定されており、高田馬治もそのために奔走していたのでした。

その翌年（昭和5年）には天皇が親閲する陸軍特別大演習が広島・岡山両県にわたって開催されました。戦前には、この特別大演習は国家の一大行事で、開催地では道路整備などの土木事業が進められ、地域の物産の陳列が行われるなど、地域が発展するための基盤整備の機会とされた点では、戦後に発展する国民体育大会や博覧会などの行事を彷彿とさせます。

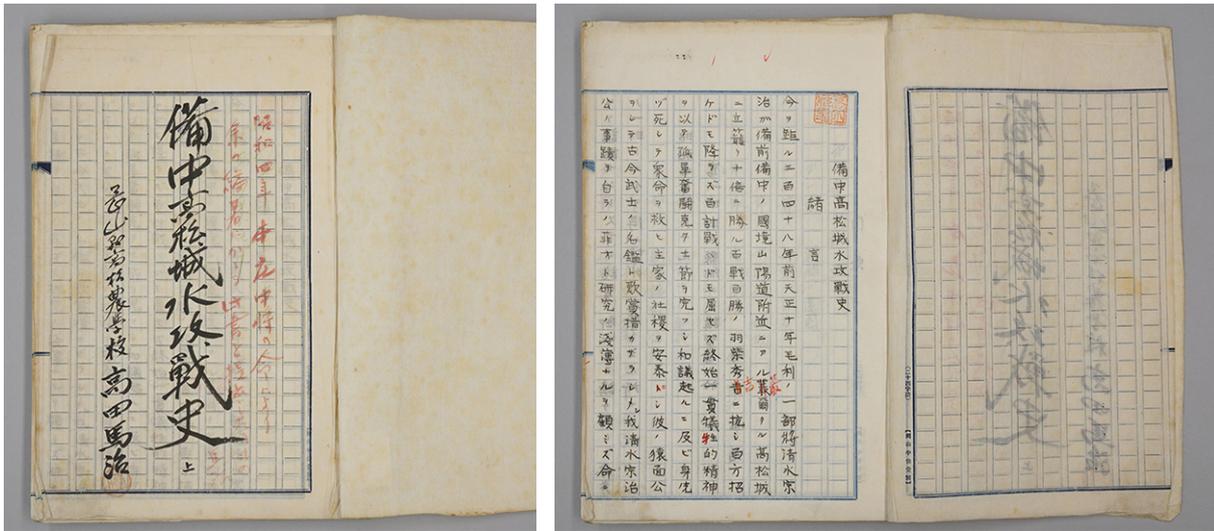
この年の大演習では陸軍将兵が東西に別れて模擬戦を繰り広げた後、11月16日に昭和天皇が高松農学校へ行幸して参加した将士を親閲することになりましたが、その日の午前中に農学校の一室で高松戦役に関する進講（御前講演）が行われることになり、進講者には高田馬治が選ばれました。

彼が講演の後に記したところによると、その年の6月12日に参謀本部の庶務課長の篠塚大佐から本人へ聴取があり、医師や警察による身辺調査が行われました。8月8日には岡山連隊区の本川省三司令官から高田馬治が11月の陸軍大演習における進講の候補者となったことが告げられ、草案の提出を求められました。以後、草案の提出と訂正が幾度も繰り返され、その間には憲兵隊による身元調査も行われて、9月2日に参謀本部の二宮中将や篠塚大佐らを高松城址に迎えて案内をしました。この間の10月10日に岡山工業学校へ掛図の製作を依頼しており、25日に完成しています。そして10月30日に彼が進講者として正式に決定したとの通知を受けて、一般にもそのことが広報されました。

以後、予行演習が繰り返されましたが、11月13日に陸軍大臣代理として派遣された小磯国昭軍務局長らの前でそれを行ったときは緊張のあまり出来映えが悪く、自責の念に苛まれて一時は自決を思うまでに至りました。しかしその夜に自宅で神仏に祈り、沈思すると突然戦慄が起こって、18頁にわたる原稿をすべて暗唱し、16日の進講に臨むことができたことと記しています。

金谷範三参謀総長や山本五十六連合艦隊司令長官、一戸兵衛大将（元岡山駐屯第十七師団長で、学習院院長や教育総監を歴任）など臨席した軍の中枢の人々や、香坂昌康岡山県知事らが固唾を飲んで見守る中、講演は大成功で、予行演習から始終見守ってきた小磯軍務局長らはハンカチで目頭を押さえていたとのことでした。

家に帰り着くと、これまで彼を支え、不測のときのために身辺の整理さえ告げられていて、心配していた家族から暖かく迎えられました。彼の目からは、とめどなく涙がこぼれ落ちました。



1-1 高田馬治『備中高松城水攻戦史』上（手稿）

昭和4年2月19日 25.0cm × 17.0cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/6）

昭和4年に第十師団長の本庄繁中将から師団将校のために稿を求められ、岡山県郷土史講習会での発表原稿を訂正して提出した控えです。内容は『高松城の水攻』（昭和40年）に再録されています。

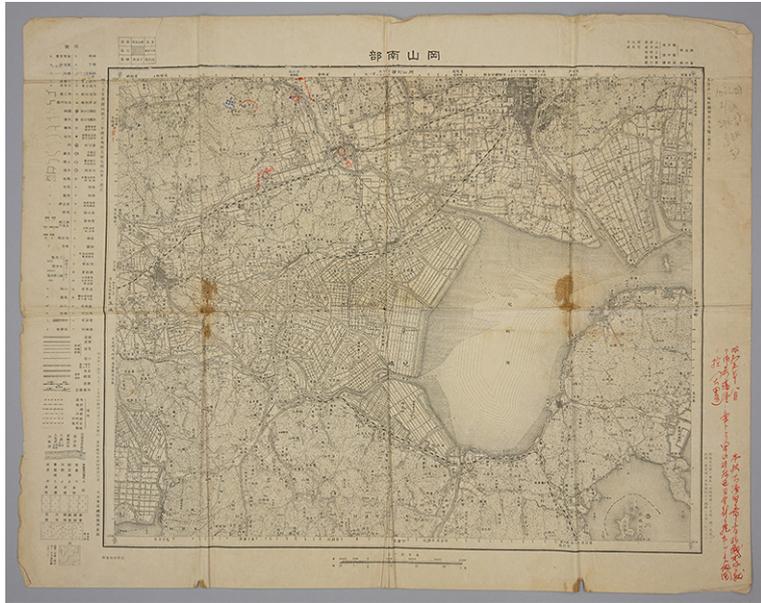
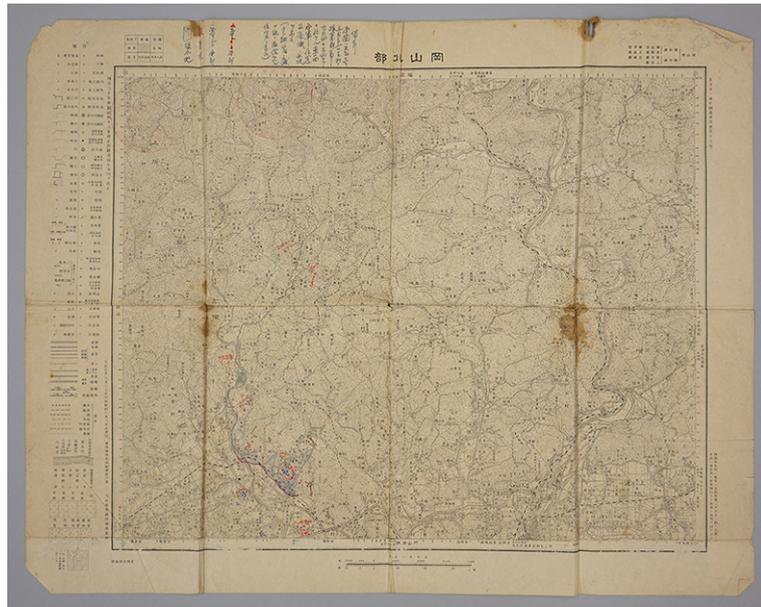


1-2 昭和五年特別大演習地図 1/5万

昭和5年 91.6cm × 63.4cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 093.96/1）

昭和5年の陸軍特別大演習の地図で、模擬戦が行われた場所が朱線で示されています。

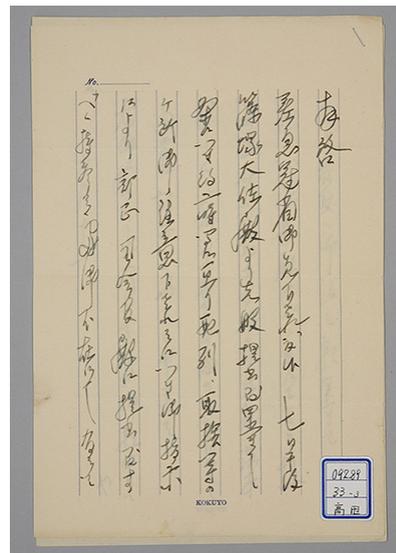
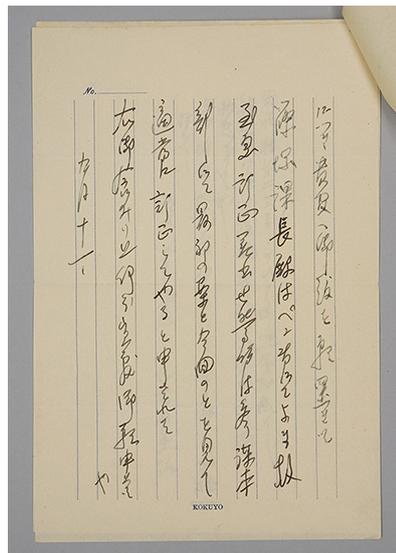
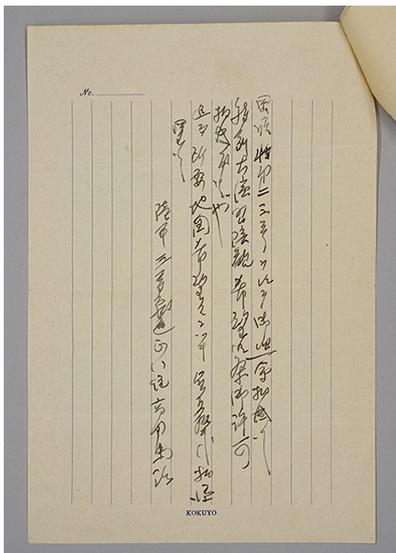


1-3 地形図 1/5万 岡山南部、岡山北部

岡山南部（明治44年）、岡山北部（大正元年） いずれも45.5cm × 57.9cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫092.91/2-1, 2）

高松城水攻めの研究成果を書き入れた、御前講演の前に陸軍へ提出した地図です。



拝啓
至急冠省御免下され度候 七日午後
篠塚大佐殿より先般提出致置き候し
案につき約二時間に亘り配列、取捨等
ケ所御注意下され候につき御指示
により訂正司令官殿に提出致す
べく持参致候処御不在にて有之候
につき貴殿へ御報を願置き候
篠塚課長殿はヘン書にてよき扱
至急訂正差出せ被可候付参謀本
部にて最初の案と今回のを見て
適当に訂正してやると申されて
右御含み置何分宜敷御願申上候也
九月十一日
岡□□第三号ヲ以テ御照命□□□
特別大演習陪観希望□案御許可
□□□候也
追而所要地図希望之□□□□□□□□
置候
陸軍三等獣医正八位高田馬治

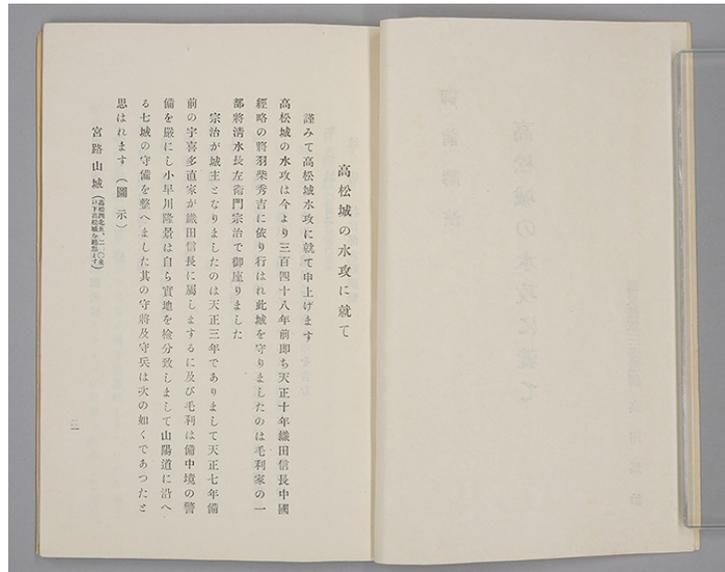
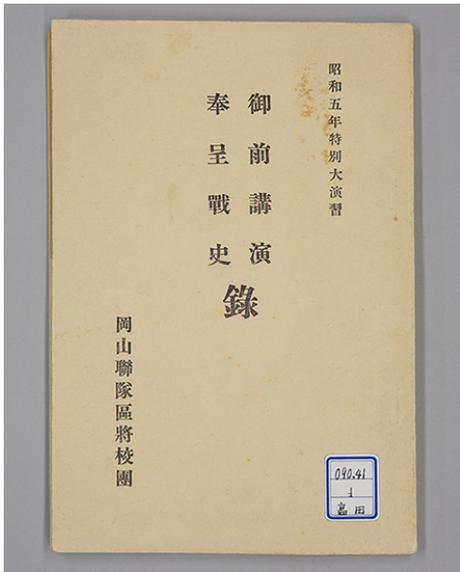
1-4 御前講演の原稿に訂正を指示する書簡の控え
昭和4年9月11日 22.5cm × 15.0cm 3枚
岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.89/33-3）
御前講演の原稿に対する参謀本部庶務課長の篠塚大佐からの訂正指示を伝える、
岡山連隊区の本川司令官からとみられる書簡の控えです。慌ただしい様子が伝わっ
てきます。一部に判読ができていない箇所（□のところ）があります。



御前講演を果たした直後の高田馬治
 昭和5年11月16日
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.89/40-2）
 高田馬治のもとで大切に保管されてきた写真です。その時の張り詰めた雰囲気伝わってきます。



御前講演の会場（絵葉書）
 昭和5年
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.89/40-3）
 上掲した講演直後の高田馬治を撮影した写真は少しぶれがありますが、こちらは細部まで明瞭に写っているの、掛図の図柄などを含めて当日の室内の状況がよくわかります。

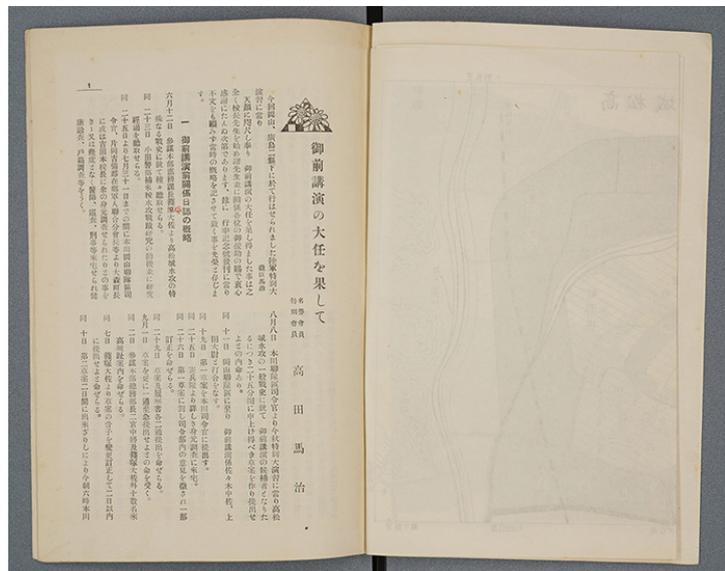
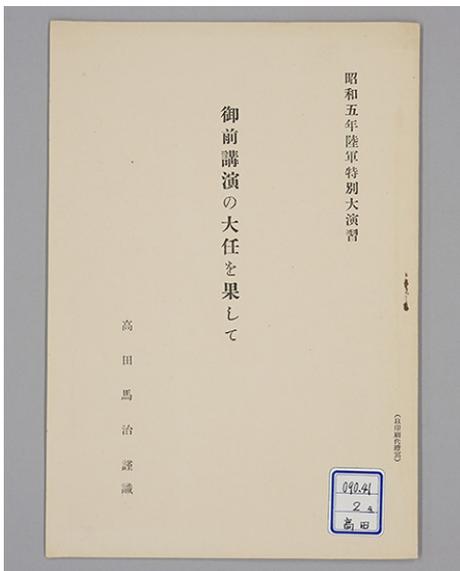


1-5 岡山連隊区將校團『昭和五年特別大演習 御前講演奉呈録』

昭和5年 22.3cm × 15.1cm

岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 090.41/1)

高松城水攻めに関する高田馬治の講演原稿と、明禪寺合戦に関する赤城雅二退役陸軍砲兵中尉の文が収録されています。



1-6 高田馬治『昭和五年特別大演習 御前講演の大任を果して』

昭和5年 22.3cm × 15.3cm

岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 090.41/2)

御前講演の原稿と前後の日記を収録し、関係方面への報告とされた冊子です。御前講演までの緊迫した遣り取りがうかがえます。



1-7 「高松城水攻戦図 1/5,000」と「高松城趾図」
 昭和5年（水攻戦図）199cm × 185cm、（城趾図）197cm × 155cm
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/25,26）
 昭和天皇への御前講演のとき実際に使用された掛図で、岡山工業学校に委嘱して特別制作されたものです。



1-8 御前講演御座所入口の柱上被、指し棒
 昭和5年
 （指し棒）長さ 192.0cm
 （木箱）213.7cm × 18.8cm × 高 14.4cm
 （柱上覆）183.0cm × 10.6cm
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 095.21/2）
 柱上被は高松農学校の天皇御座所で用いられ、竹の指し棒は御前講演で使用されたものです。それらと掛図を木箱で保存してきました。



高松城水攻戦圖と
高松城趾圖

2 史蹟指定

御前講演の進講者を見事に務めたことは、高田馬治にとって生涯最高の名誉ある出来事となりましたが、高松城の保存を願う地域の人々にとってもそれは大きな前進となりました。というのも、その前年の昭和4年12月には、高松城址と水攻め堤防の遺構が文部省から史蹟として承認され、指定を受けていたからです。この2つの出来事について、直接の関連を示しているものがあるというわけではありませんが、地域の人々が城址の保存に務めてきたこれまでの活動の展開を踏まえてみるならば、前年の史蹟指定があつてこそ、大演習での進講を通じて高松城をめぐる歴史が全国に広報されたと考えることができるのではないのでしょうか。

高田馬治の関係資料の中には、その頃に全国各地で史蹟指定の調査事務に携わっていた文部省嘱託の上田三平とやり取りを重ね、上田の指示や教示のもとで数多くの申請書類を取りまとめ、岡山県を通して提出し、念願の指定にこぎつけた様子がうかがえる文書が含まれています。

それらは上田三平へ提出した書類の正本の控えとして、備忘のために高田馬治が作成した記録であり、清書した正本の内容を筆写して手元に残したものか、あるいは直前の草稿に最終段階の訂正を書き入れて保存したものとみられます。

それらの中には、石井山の南麓の蛙ヶ鼻付近にわずかに残存している水攻め堤防の遺構と城址を、高松農学校の学生たちとともに実測した図面をもとに作成された書類があり、高田馬治が長い時間をかけて現地調査を重ねながら得てきた、遺跡の実態の綿密な把握が基礎になっています。

そのほかにも城址の石垣の図面や関連する古図の写しなどが加えられており、古文献に残る記述などもあわせつつ、水攻め戦役の遺構が現在の高松城址にどれだけ確かに残っているかを具体的に明らかにしようとした内容になっています。

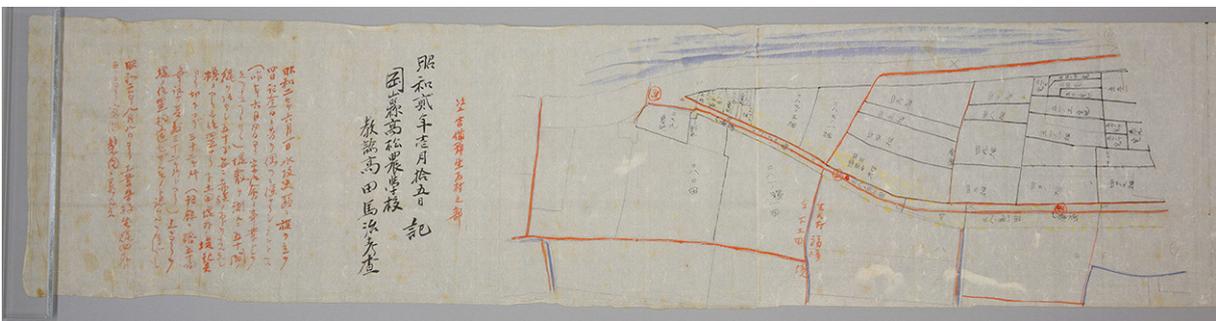
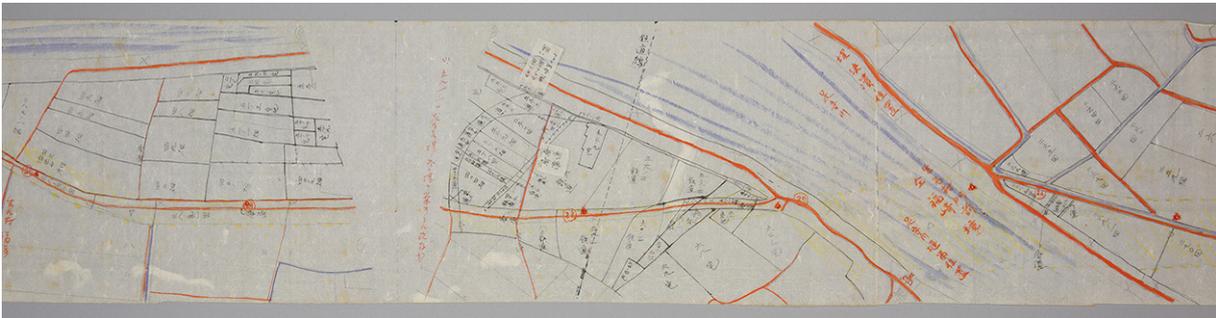
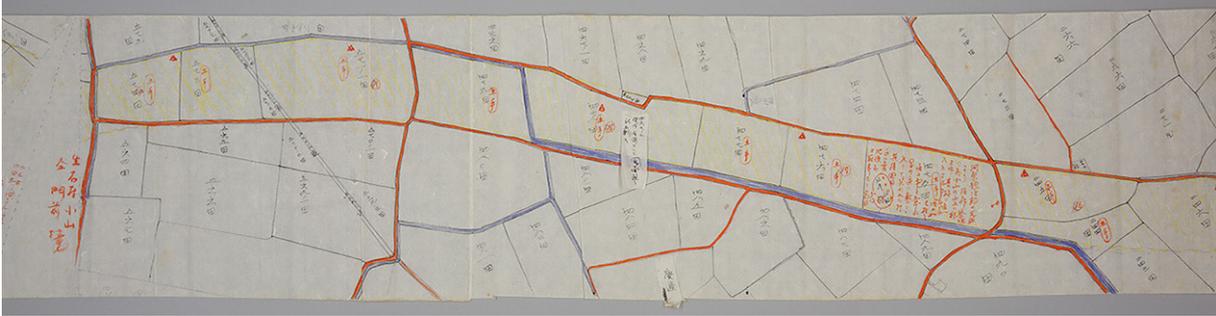
明治時代になると、全国の社寺がそれまで得ていた禄を失い、施設の維持が困難になることが生じていました。そこで、歴史的由緒があり貴重な施設や什物を所蔵する古社寺などへは政府が補助し、保存をして行く必要がいわれるようになってきていました。そのため明治30年の古社寺保存法や、大正8年の史蹟名勝天然記念物保存法などの立法を通じて、史蹟や文化財などの保護制度が次第に整ってきていたのでした。

しかし、行政が手を差し伸べるにあたっては、史蹟等の学術的な正しさが問題となってきます。地域を思うあまりに地域振興や観光客誘致のために指定を求める傾向もあり、「これは誰々の墳墓である」などとするような、歴史の物証を欠いた後世の付会による比定も行われやすく、そのためには申請された場所に歴史の真実があるかどうか、わけでもそれを証するだけの具体的な遺構が確かに保存されているかどうかということが、当時においても審査にあたっての重要な要件でした。

そのため、史蹟指定にあたっては申請書類に遺構の形状を精密に実測した図面を添えて提出することが求められており、それを受けて文部省の調査官が現地を確認し、その報告をもとに指定の可否が審査されることになっていました。

大正時代に活躍した黒板勝美や、彼のもとで実務に精通し、やがて後任の調査官を務めた柴田常恵、上田三平などの専門家の判断が、史蹟指定にあたっては大きな役割を果たしました。

城址と関連遺構の保存に向けて着実に続けられた活動の延長上に、昭和4年の史蹟指定も、昭和5年の御前講演も、実現をみたのでした。

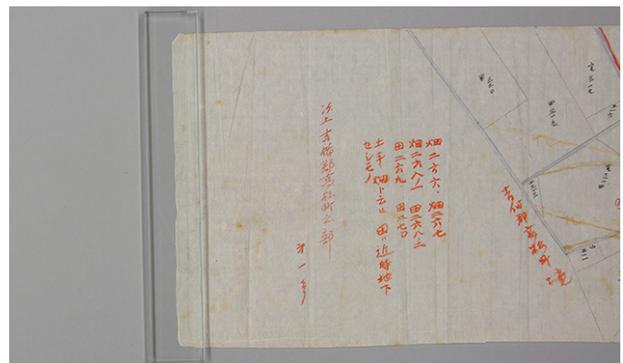
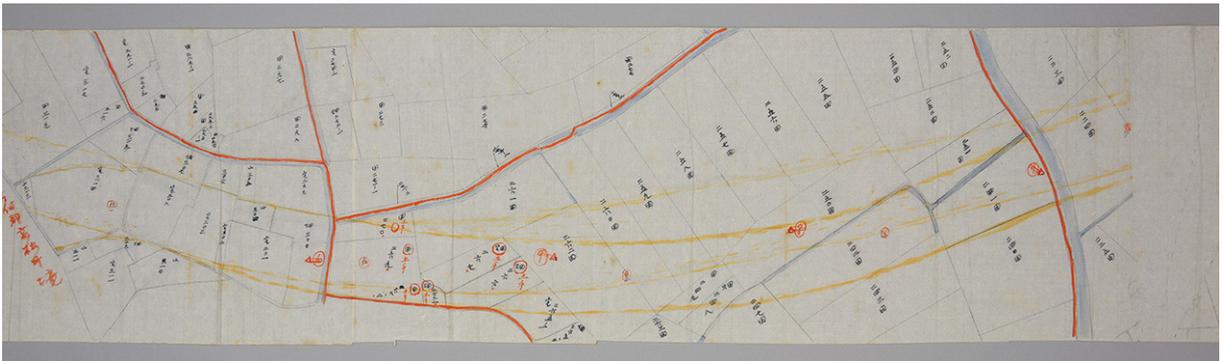
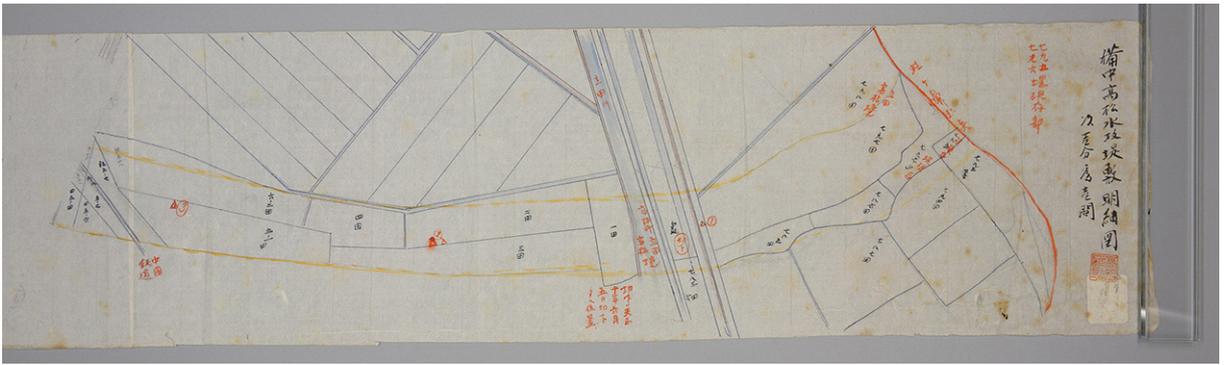


2-1 備中高松城水攻築堤敷明細図（生石村の部）

昭和2年1月15日 18.0cm × 343.0cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/16-2）

地籍の観察と現地での実測から水攻め堤防の位置を推定した2枚の図の中の1枚で、生石村の部は西部に当たります。

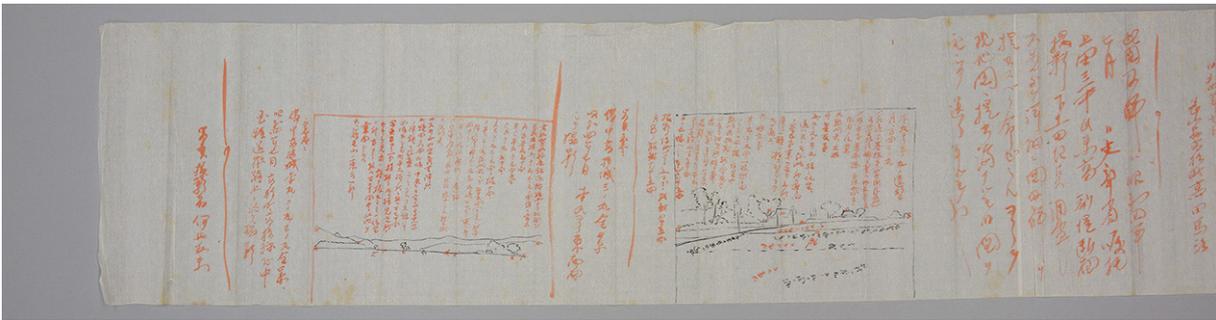
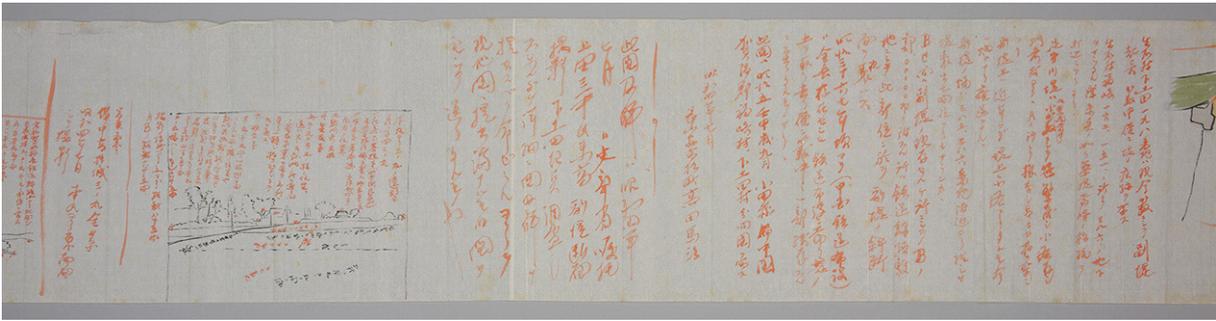


2-1 備中高松城水攻築堤敷明細図

昭和2年1月15日 18.0cm × 216.6cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/22-1）

地籍の観察と現地での実測から水攻め堤防の位置を推定した2枚の図の中の高松町の部で、高田馬治が考えた水攻め堤防の全体の中では南部に相当します。堤防がよく残存しているのはこの図の右端、蛙ヶ鼻から立田川までの区間です。

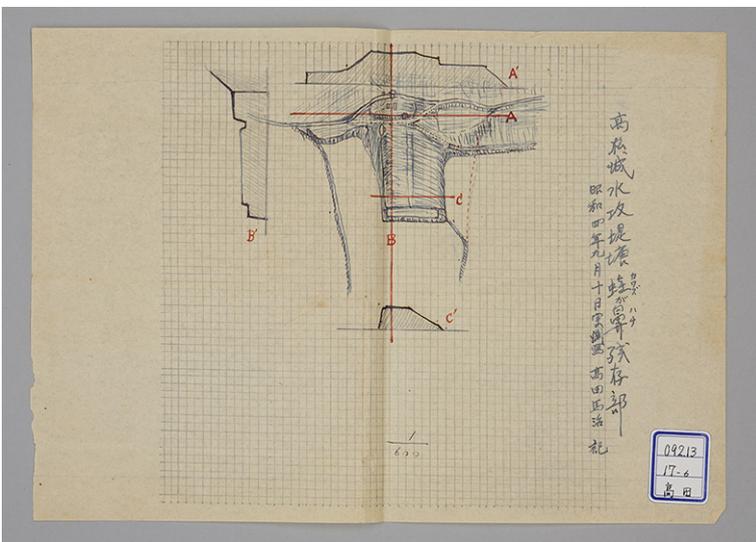


2-2 高松城水攻当時足守川副堤図

昭和4年7月 18.0cm × 174.7cm

岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 092.13/16-1)

現在では、水攻め堤防は立田川付近に小規模なものを設ければ城の周囲を冠水させるのに十分だったと考えられてきていますが、高田馬治は戦記などの記述から大規模なものを想定し、足守川にもかかるように副堤の位置を推定しています。しかしこうした現地調査と作図の努力が、史蹟指定における文部省への申請に活かされて行きました。



2-3 高松水攻堤塘蛙ヶ鼻残存部

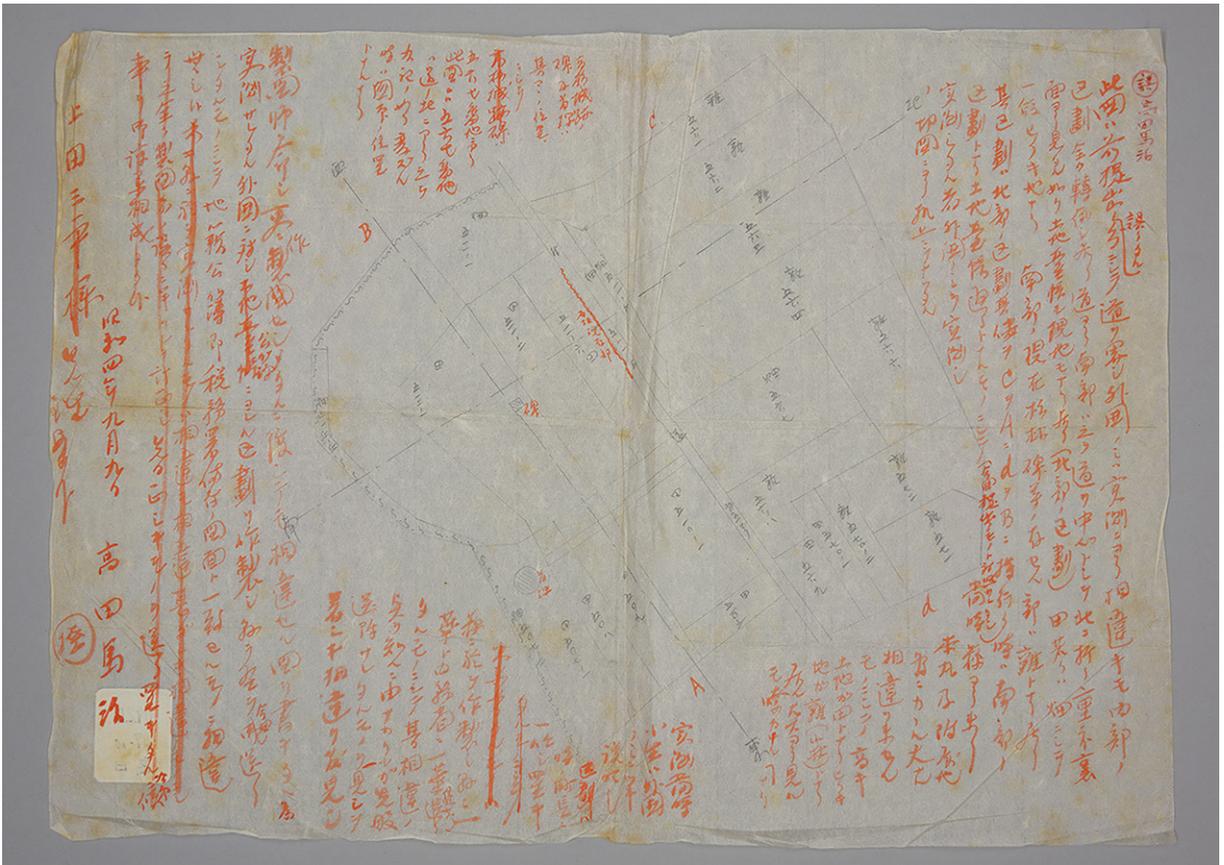
昭和4年9月10日実測写

18.8cm × 26.4cm

岡山市立中央図書館蔵

(高田文庫 092.13/17-6)

水攻め堤防で現在も明瞭に残存する部分の実測図です。昭和4年9月9日に上田三平へ提出した書類の控えに同様の図(本書14頁左下)があり、日付がその翌日であることから、何か事情があって図を描き直したのかも知れません。

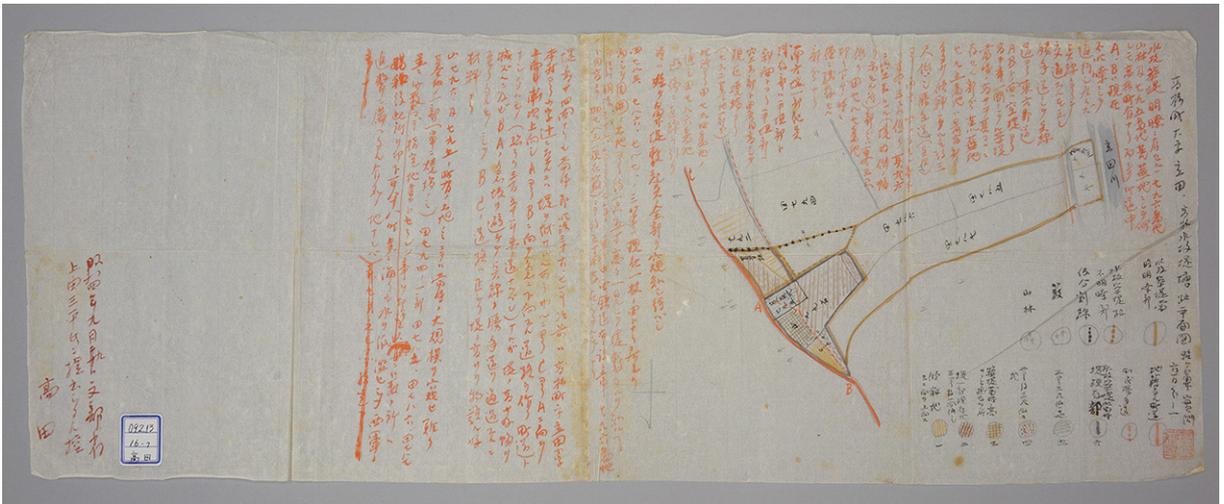


2-4 上田三平へ昭和4年9月9日に提出した書類の控えの内

昭和4年9月9日 24.8cm × 34.5cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/17-10）

高松城本丸跡の図です。後の時期に書き入れられた朱色の文字が、びっしりと図を囲んでいます。指定時のやりとりが窺われるさまざまな情報があります。

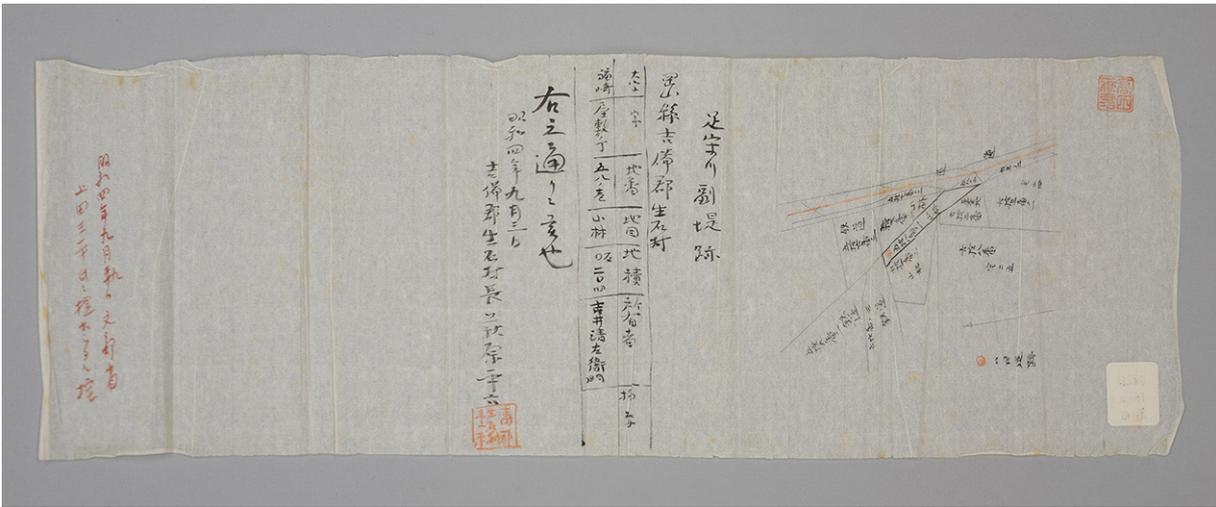


2-4 上田三平へ昭和4年9月9日に提出した書類の控えの内

昭和4年9月9日 24.3cm × 63.5cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/16-7）

これは、堤防が残存する蛙ヶ鼻から立田川までの区間を詳しく示した図です。図の左下隅に、やや濃い色の朱文字で、昭和4年6月9日に上田三平へ提出した書類の控えであることが書き入れられています。

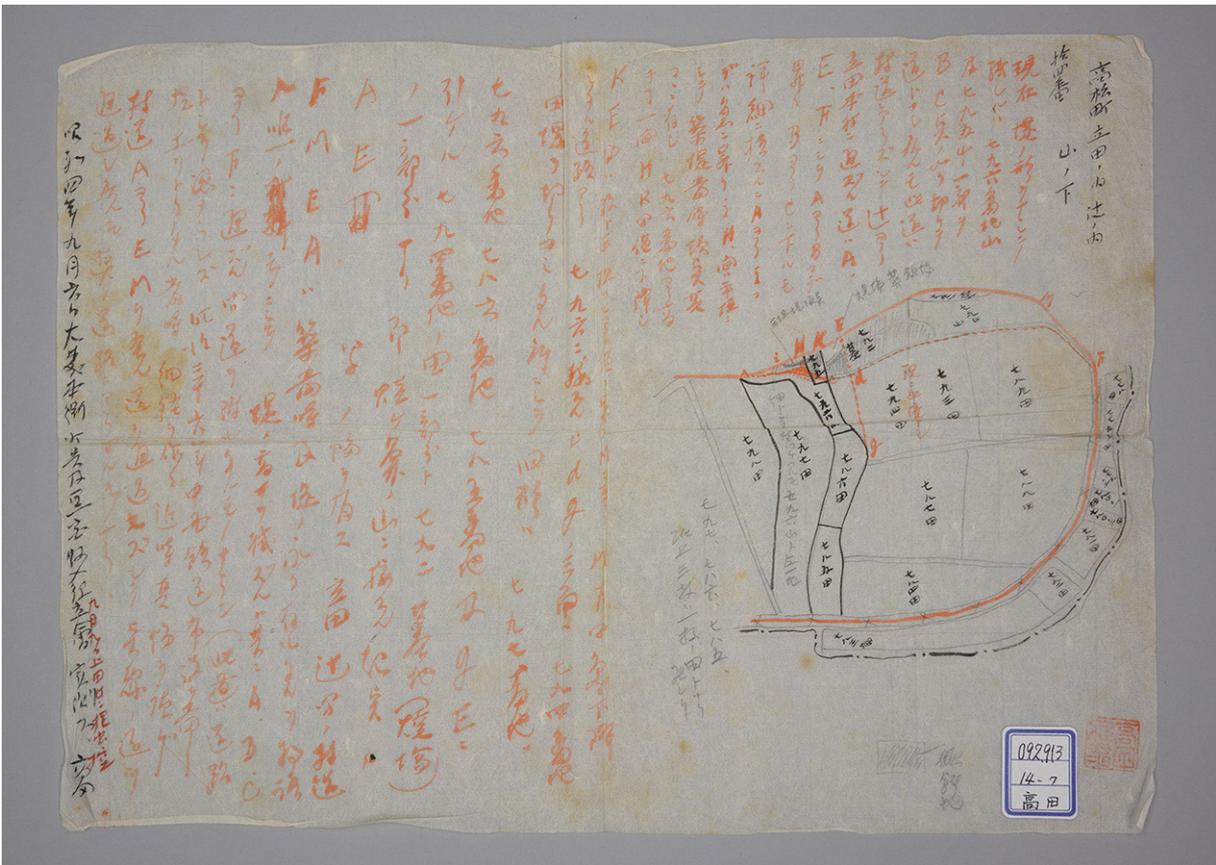


2-4 上田三平へ昭和4年9月9日に提出した書類の控えの内

昭和4年9月9日 17.8cm × 52.5cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/16-3）

足守川副堤跡を生石村長の名前で申請した書類の控えです。文部省への申請は自治体から行うことになっていたの、関係町村の決定としてそれは行われました。



2-4 上田三平へ昭和4年9月9日に提出した書類の控えの内

昭和4年9月9日 24.3cm × 32.4cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/14-7）

堤防が残存する蛙ヶ鼻から立田川までの区間の広域の図です。15頁の下に掲出した書類の図と異なり、ここでは上方が蛙ヶ鼻の堤防の付け根部分にあたります。